

ACLSニュース

- 当プログラムのプログラムコーディネーター（教育院長）である秋山泰教授（情報理工学研究科）が、第11回 産学官連携功労者表彰 厚生労働大臣賞（案件名：「顧みられない熱帯感染症」創薬研究データベースの開発）を共同で受賞されました。
- 当プログラムのプログラム担当者である鈴木崇之准教授（生命理工学研究科）が、2013年度（第85回大会）日本遺伝学会奨励賞（受賞テーマ：ショウジョウバエの視神経軸索の層特異的投射の分子メカニズム）を受賞されました。

- 当プログラムの課程参加学生である松原惇高さん（生命理工学研究科）が極限環境生物学会 2013年度（第14回）年会において、ポスター賞を受賞しました。
- 11月8日（金）ACLS秋の交流会をすずかけ台キャンパス J3棟で開催しました。「夏の学校ロンドン」のお疲れさま会と10月からのACLS課程参加学生の歓迎会も兼ね、約80名の教員・学生が参加する楽しい催しとなりました。

Global Communication Contest 2013の開催

近藤科江 情報生命博士教育院 異文化コミュニケーションWG委員長・生命理工学研究科 教授



8月7日（水）にACLSの異文化コミュニケーション科目であるGlobal Communication, Global Presentation, Global Writing, Global Debateを履修した学生を対象にスピーチコンテストをすずかけホールにて開催しました。

英語でのスピーチコンテストという初めての企画に、少し心配をしていましたが、多くの参加者があり、そのレベルの高さには、

金田祐輔（生命理工学研究科 M2）



私はこの6月まで1年間ノルウェーに留学していました。現地では美しい自然に魅了されたと同時に冬の短い日照時間に苦しめられ、コンテストではこのことを中心に紹介しました。大勢を前に英語でプレゼンする機会は今まであまりなかったため、大いに緊張して臨みましたが、会場の雰囲気はとても暖かく、気持ちよく伝えることができました。（特に近藤先生には大いに盛り上げていただきました。改めて御礼申し上げます。）今回コンテストに参加して驚いたのは、どの発表者も自分の研究や思いを上手に伝えられていることでした。東工大生という英語が苦手というイメージですが、積極的な東工大生がこれだけいることを知り、

本当に驚かされ、感動さえ覚えました。英語力やプレゼンテーション力で優劣付けがたい中、ストーリー構成や会場を巻き込むテクニックで、金田さんは審査員や聴衆にしっかりアピールして、誰もが納得する優勝を獲得しました。審査員も観衆も一緒に楽しめたコンテストとなり、審査員を快諾して下さった異文化コミュニケーション科目の講師の先生やACLS担当教員の先生方から今回の開催を望む声を聞くことができました。審査員の先生方、コンテストの準備に奔走して下さいましたACLS特任教員の先生方（特に千葉先生、Jović先生）、事務局の皆様感謝申し上げます。

また自分と同じく英語に悪戦苦闘しているだろう仲間の本気の発表を聞くことができたことはとても良い刺激になりました。

9月にはロンドンでの夏の学校に参加し、昼は学術的な話、夜はパブで他国からの学生と四方山話に花を咲かせました。夏の学校でも感じたのですが、ディスカッションではまだまだ伝えたいことを伝え切れていない場面が多いので、後期に受講しているGlobal DebateをはじめACLSを大いに活用して今後も努力していきたい考えです。



近藤先生とコンテスト入賞者

編集後記

ACLS News Letter Vol.4は、夏の学校の特大版として、通常4ページ構成を大幅に増やし、8ページ構成となりました。これにより、2013年の夏の学校の学生と教員の熱が少しでも多くの方に伝わることを期待しております。次号ではまた通常版に戻る予定ですが、ACLSの活動を多くの方にお届けしたいと思います。（K）



ACLS News Letter 第4号（2013年12月9日発行）

東京工業大学 情報生命博士教育院
（文部科学省 平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」採択）
すずかけ台事務室
〒226-8501 神奈川県横浜市緑区長津田町4259, J3-141（J3棟407号室）
Tel:045-924-5827 Fax:045-924-5930
office@acsls.titech.ac.jp http://www.acsls.titech.ac.jp/

ACLS News Letter



vol.04
2013.12

東京工業大学 情報生命博士教育院
Education Academy of Computational Life Sciences (ACLS)
（文部科学省 平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」採択）

contents

- 1-2 巻頭言～2013年ロンドン夏の学校フラッシュレポート
- 2-7 第2回国際夏の学校を通じて、学生体験記
- 7 Future誌
- 8 ACLSニュース、トピックス、編集後記

巻頭言

2013年ロンドン夏の学校フラッシュレポート



岩崎博史
情報生命博士教育院
国際連携部会 部会長
生命理工学研究科 教授

College London (ICL) に到着（現地時間は8日夕刻）。軽くおにぎり弁当をとって、すぐに就寝。翌9日（月）から、実質的にスタートしました。

初日午前中は、Faisal先生（ICL）と四方先生（阪大）の講義を受講しました。午後は、早速、外国の大学生とのグループ活動（スムーズに仲良くなるための方策を各々のグループで企画実行しました）。ちなみに、今回は、東工大ACLS学生42人に加え、ICLから10名、仏国Strasbourg大から2名、米国のUCLA大から2名、Purdue大から1名の大学院生が参加しました。参加学生は、東工大大学院生・外国の大学院生からなる10グループに分けられました。各グループで夕食をとった後は、ポスターセッションで盛り上がりました。このポスターセッションは、後のグループワークの重要な役割を演じることになります。

2日目となる10日の午前中は、Albert先生（University College London: UCL）、山村先生（東工大）、Zafeiriou先生（ICL）の講義。このあとは、今回の夏の学校のメインイベントであるグループワークで午後丸々過ごしました。そして、その成果発表は、3日目となる11日（水）の朝一番から。グループワークのテーマは、10年後、もしくは20年後の科学的な発見もしくは達成を予測して、それを「Future」誌（インパクトファクター48の架空の雑誌）に論文として投稿するというものでした。その論理的根拠として前日のポスター発表をうま

く引用できたグループは高評価となるという採点基準も設けました。予測した未来の科学について、各グループがプレゼンテーションし、作成した論文を相互に読んで、疑問点を質問しました。午後の最初は、Gilestro先生（ICL）、Nagai先生（Medical Research Council）、Kihara先生（Purdue大）、秋山先生（東工大）、山村先生、四方先生をディスカッサーとするパネルディスカッションを行い、それぞれの論文をcriticizeしました。ディスカッサーの忌憚のない攻撃に、学生や教員がタジタジになる場面もあり、非常に盛り上がりました。語学力があればな、と痛感した学生も多かったと思いますが、内容が鋭ければ通用するということも感じ取れたのではないのでしょうか。医療データを日常生活に集めることができる未来型装着スーツ「DORAEMON」や「3Dプリンターで臓器を作る。」など、夢のある「論文」に議論が集まりましたが、最終的に、10年後のBest「Future」誌賞は、「リポソームで形成する新しい生合成系」、20年後のBest「Future」誌賞は、「地球温暖化に伴う蚊の北侵に対する新しいバイオテクノロジーを用いた対抗策」に決定しました。両論文とも、ポスター発表での話題を組み込みながら、うまく発展させた力作といえるでしょう。

その後、Kihara先生とNagai先生の講演を拝聴し、藤山先生（UCL）から海外交流のお話しをしていただきました。

次ページへ続く

前ページより

その後の閉会式で、ポスター賞やグループワークの表彰式があり、各々の努力が報われた瞬間でもありました。夜になってからテーマの変更を余儀なくされたグループもあったと聞きます。小さな失敗を数多く乗り越え、将来に繋がる貴重な体験ができたと思っています。

メインイベントが終わったこの日の夕方、東工大学生主催の日本文化を紹介する立食パーティーが行われました。日本食レストランMUGENの方々に寿司、てんぷらの作り方のデモンストレーションを始め、焼きそば、カレーライス、おでんなどの料理を提供してもらいました。外国の学生にも興味を持ってもらえるように、東工大生が長い時間をかけて議論し準備した甲斐があり、非常に好評で盛り上がりました。習字、ゆかた試着、折り紙、日本酒の試飲といった文化紹介のブースは常にぎわっていました。ICLでは、普段おなかを満たすような本格的な料理が出るパーティーは殆どないらしく、これだけの料理と文化紹介をアウェーの地で盛り込んだ学生の企画力に賞賛の声が上がっていました。日本文化を接点に、外国人学生と楽しい時間を過ごす

素晴らしい夕べとなりました。

4日目の9月12日(木)にはケンブリッジ大学のvan Veen先生を訪問する形で主にケンブリッジ大学の薬学部と構内の見学を行いました。午前中は全員で薬学部の講義を受けた後、ケンブリッジの歴史的建造物を見学しました。午後の早い時間には、パンティング、サンガーセンター訪問、MRC訪問の3グループに分かれて、それぞれ有意義な見学を行いました。パンティング体験組は意外と難しい船の操作に悪戦苦闘しつつ、ケンブリッジ大生気分浸れたことと思います。研究所の見学も、実際に行ってみることで、意外とコンパクトな建築物と自然に囲まれたロケーションなど、肌で感じる事ができましたことと思います。どちらの研究所も非常に整った環境に整備されていて、イギリス

の町並みと同様に、住環境、職場環境に気を配っているスピリットを感じることができました。最後にケンブリッジ大学内のNewham Collegeの素敵なホールで晩餐会が行われ、van Veen先生とその学生2名と共に格式のあるディナーを楽しみました。学生たちには研究以外にも文化交流を通して感じる場所があったと思います。日本に帰って来て、自分の研究、生活、環境などを見つめ直すきっかけになったのではないのでしょうか。

ちなみにGilestro先生は日本の「針なしホッチキス」にいたく感動しておられました。



全体集合写真

夏学校準備編

学生実行委員会の活動にたずさわって

永田裕一 特任准教授

夏の学校は学生実行委員会を中心に企画から運営まで行い、私を含む特任教員はサポート役として学生実行委員会に加わりました。本稿では学生実行委員会の活動についてお伝えしたいと思います。



学生実行委員会は9名の学生有志で結成されました。委員長を除くメンバーはいくつかの委員会招待講演、講演予習、海外学生、グループワーク、ポスターセッション、文化交流夕食、ケンブリッジ訪問、要旨集、会計)のリーダーとなり、委員長を中心に夏の学校をオーガナイズしていきます。また、

ACLSから参加する全ての学生はいずれかの委員会に所属します。今回は初の海外開催ということで、どのような企画を行えば海外参加者、特に地元参加学生にとって魅力ある夏の学校になるのか、実行委員会内で相当議論を重ねました。また、アウェー開催であることによる現地とのやり取りの難しさが、今回の夏の学

校のオーガナイズは当日の運営を含めて本当に大変であったと思います。近年、大学院生も国際会議などで海外へ行く機会も多くなって来たかと思いますが、国際的なイベントを企画運営する機会はその多くはないと思います。夏の学校を終えて実行委員会のメンバーは大きな達成感と経験が得られたことと思います。

	September 8th	September 9th	September 10th	September 11th	September 12th	September 13th
7:00	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8:00		Breakfast (Sheffield)	Breakfast (Sheffield)	Breakfast (Sheffield)	Breakfast (Sheffield)	Breakfast (Sheffield)
9:00		8:00- Registration 8:30-8:40 Opening ceremony 8:40-9:40 (Skempton, 301) Dr. Aldo Faisal	8:30-9:30 (Skempton, 301) Dr. Joerg Albert	9:00-10:30 Preparation	8:30 Bus to Cambridge 9:45 Arrival	8:30-9:00 Group photo 9:00-16:00 Cross-cultural activities
10:00	9:30-10:30 Meeting at NRT	10:00-12:00 (Skempton, 301) Dr. Tetsuya Yomo	9:40-10:40 (Skempton, 301) Dr. Masayuki Yamamura 11:00-12:00 (Skempton, 301) Dr. Stefanos Zafeiropoulos	10:40-12:00 (Skempton, 301) Group Work Presentations	10:00- Introductory meeting 11:00-13:00 Campus Tour	
11:00						
12:00	11:45 Departure	12:00-12:30 (Skempton, 301) Group Work Explanation	Lunch (Sheffield)	Lunch (Sheffield)		
13:00		12:30-18:45 Lunch (Sheffield)	13:00-18:00 Group Work (Skempton, 301)	13:00-14:30 (Skempton, 301) Group Work Panel Discussion	Lunch (on your own)	Lunch (on your own)
14:00					14:00-19:00 Campus Tour	
15:00		Cross-cultural activities (Group activity)		15:00-16:00 (Skempton, 301) Dr. Daisuke Khara 16:10-17:10 (Skempton, 301) Dr. Kiyoshi Nagai 17:20-17:40 (Skempton, 301) Dr. Taku Fujiyama		
16:00	16:20 Expected arrival time at LHR			17:45-18:30 Closing ceremony		16:00 ICL
17:00				19:00- (Flowers Building, G47) Cultural Exchange Dinner		17:15 Going to LHR
18:00	Japanese rice ball "onigiri"	Dinner (on your own)	Dinner (on your own)			
19:00		19:00-21:10 Poster session (Skempton, 307)		19:00-21:00 Dinner at Newham		19:15 Departure
20:00						September 14th
21:00					21:10 Bus to ICL	15:00 Expected arrival time at NRT
22:00						

ACLS 夏の学校ロンドン全日程

学生実行委員会活動の様子



学生実行委員会のミーティングが定期的に行われ、各委員は自分が担当する企画の進捗状況を説明し、重要事項は全体で議論します。また、夏の学校の全体的な方向性についても皆で考えられます。夏の学校の全体像が形作られるにつれ、開催当日に向けて期待感が高まりました。(永田)

ロンドンへの出発



参加者全員が集合時刻を守り(驚き!)、落ち着いた雰囲気の中結団式が行われました。教育院長からは「失敗を恐れず、沢山失敗して下さい。」との激励を頂き、「恥ずかしいという気持ちを忘れましょう。」との矢野委員長の掛け声の下、学生は決意を新たにしました。(緒方)

新しい仲間と合流



長時間のフライトの後、チャーターバスでICL 宿舎(サウスサイド)に到着。米国やフランスからの海外参加学生も無事到着していることを確認。初の顔合わせで、まずは自己紹介から異文化コミュニケーションの開始です。(緒方)

矢野雅大 学生実行委員会 委員長 (生命理工学研究科 M2)



今年度の「国際夏の学校」で学生実行委員会委員長をさせていただきました矢野です。今年度は「異なる分野や大学の間での交流を、昨年度の活動を踏まえてより深くかつ効果的に行うこと、各自の将来について思い描けるようになる」ということを目標として、本年9月8日から9月14日にかけてICL へ一週間の遠征に行ってきました。一週間という期間を活かしきり昨年度以上の質と量の交流を達成するために、学生実行委員会では多数の「仕掛け」を遠征に盛り込みました。例えば、市内研修を最初に持ってきたことによりグループワーク中の学生間での会話はよりリラックスしたものとなり、

ポスター発表とグループワークとの連携により両企画への学生の積極性が増しました。目玉企画であるグループワークでは、「各自の知識と発想力・思考力を組み合わせて10年後20年後の研究を予測し論文の形式にまとめる」というテーマを今年は採用しました。その成果をまとめた冊子が近日中に公開されると思います。今年度の夏の学校の集大成となりますので是非お待ちください。

まだまだ書くことは尽きませんが紙面の都合もありますので、学生実行委員の皆さんと先生方・事務の方々の多大なるサポートのおかげで大成功となりました。報告を、この辺で終わりにさせていただきます。来年度以降も夏の学校とACLSが発展していくことを願っています。

福永和人 海外学生担当委員 (生命理工学研究科 M2)



私は学生実行委員として、主に海外学生との連絡を担当しました。旅程調整や、夏の学校に関する告知を通じて、海外学生とコミュニケーションを取りました。最初のうちは、英語でメールのやり取りをするという慣れない作業に手間取りましたが、後半はあまり時間をかけずに処理できるようになりました。規則上不可能な要求をされたり、

返事が来ないため何度も催促をしなければならなくなったりして頭を悩ませる場面もありましたが、おかげで様々な英語表現や、交渉の仕方を学ぶことができました。以来、英語でメールを送ることに対して抵抗感が無くなったと思います。また、長期休暇に入った海外学生から、休暇を終えるまで返信できないという内容の自動返信が届くなど、文化の違いを感じたことも印象的でした。事務的な仕事が多く大変な面もありましたが、非常に良い経験になりました。

▶▶ オープニング



矢野委員長の開会の辞。生命科学と情報科学の両分野から50余名の学生が集まったこと自体、今回の夏の学校の成功を意味しているとの強いメッセージ。岩崎先生からは「夏の学校を楽しんで」との暖かい言葉を頂きました。岩崎先生はいつになく愉快そうでした。(緒方)

▶▶ 講演会 1



オープニングに続いて、すぐに講演が始まりました。講演では、生命科学・情報科学の両分野で横断的に活躍する研究者が登壇しました。参加学生は、自分の主専門とは異なる分野の発表もあり、これを理解するのは容易ではなかったはずですが、講演者たちのユーモラスに工夫された発表に、熱心に聞き入っていました。(千葉)

秋川元宏 招待講演担当委員 (総合理工学研究科 M2)



今年の夏の学校では8名の方に講演をしていただきました。招待講演者は情報科学と生命科学の複合分野において研究を行っている方々であり、我々が将来目標とする方々です。講演内容は、神経科学、ブレインインターフェイス、DNA構造、タンパク質構造、等々であり、かなり幅の広いものとなりました。講演の中にはもちろん自分の専門外の内容の講演もあり、すべてを理解することは非常

に難しいことではありました。しかし、情報科学と生命科学の融合を目指し学習、研究を行っている我々にとっては非常に貴重な経験となりました。さらに、何名かの招待講演者にはグループワークの一環として行われたパネルディスカッションにおいてディスカッサーとして参加していただきました。ふだんではなかなか話すことのできない著名な研究者と将来の研究分野について議論を交わすことができ、非常に有意義な夏の学校となりました。

大上雅史 要旨集担当委員 (情報理工学研究科 D3)



「折角なら学会議の冊子に引けをとらないようなマトモな冊子を作ろう!」と、私が勝手に意気込んで始まった要旨集委員会は、4人のメンバーに恵まれ、制作も比較的順調に進んでいたかのように思われた…という前書きがしっくりくるぐらい、要旨集委員会の活動は目立ちこそしないものの紆余曲折あったように思います。実際に冊子制作を進めていると、キャンパスを隔てた所属学生間での意思疎通が思っていたよりも取り辛く、掲載項目の追加や内容回収の遅れなども相まって、余裕を持っていたはずのスケジュールに

グは気付けばギリギリ。慣れないDTPソフトの扱いに苦戦しつつも、細部へのこだわりは捨てずに、時間の許す限り取り組みました。その甲斐もあって、当日はクオリティの高さに驚いていた参加者がいたり、ポスター要旨を基に議論を行ったりする参加者の姿が散見されるなど、作者冥利に尽きる瞬間が幾度もあり、非常に充実した気分で夏の学校に参加できました。細部に渡って指摘・校閲を行って頂いた夏の学校WGの先生方と、お盆休みも返上して編集作業を行ってくれた要旨集委員の藤原君・下田君・小松君・渡部君に、この場を借りて深謝致します。

Cross Culture Activity

昨年の夏の学校の反省を踏まえて、初めて顔合わせする仲間と共に、少し雨の降るロンドン市内を散策する時間は、お互いを理解しチームメイキングのためにも良い機会となったようです。なんとなく、グループを引っ張る人が誰か見え隠れする瞬間です。(小西)



▶▶ グループワーク説明

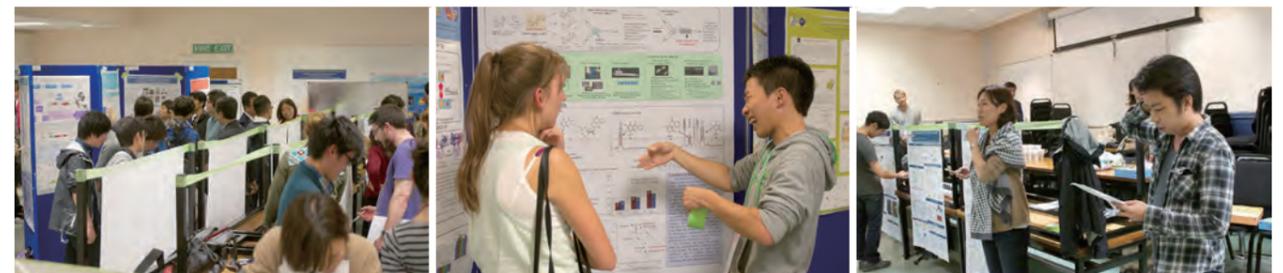


今回のグループワークは、ポスターと連携しているなど、その構成は複雑なため、ルールの説明などに十分な時間をとりました。グループワークに参加する学生は、真剣にそのルールに耳を傾け、不明な点は質問するなど積極的に参加していました。(小西)

夏の学校グループワークとは?

夏の学校のグループワークでは、全体で仮想雑誌「Future」を刊行することを課題としました。各グループでは、2013年から見て10年後(30代の自分)、及び20年後(40代の自分)の未来に予測され、さらに生命系・情報系が融合した学際的な分野の記事を作成します。この雑誌では、現在の研究分野における専門的知識を組み立て、徹底的な予測をグループに求めています。そして、その作成時の制約として、ポスターセッションでそれぞれが発表した情報系と生命系の2つ以上のポスターや論文を引用しなければならないルールを設けました。ポスターにもあらかじめ、各分野における10年間のこれまでの軌跡が理解できる工夫を取り入れて作成することを各自に求めておきました。それゆえ、過去・現在・未来という時系列で、横断的分野におけるリーダーシップの在り方が鮮明となり、グループワークと有機的な連携を図ることができました。グループ間で「インパクト」と「実現可能性」という2つの軸で競い合うことのできる実践的なワークとして設計されました。(小西)

▶▶ ポスターセッション



各自が、自分の研究を他分野の人にもわかりやすいようにまとめたポスターを作って、発表。どの学生も他の学生や先生方に対して、英語で懸命に説明をしていました。海外の学生とも活発に議論する姿が見られました。また、参加者によるポスター賞の投票も行われました。(鮎川)

奥野未来 ポスターセッション担当委員 (生命理工学研究科 D1)



私がポスターセッションの担当をすることに決まった時に、今回のポスターセッションは夏の学校らしいものにしたと考えました。分野が多岐に渡るからこそ、学会ではないからこそできることがあると思いき、考えたのがグループワークとの連携でした。グループワークで未来について考えるためにポスターセッションでは過去から現在までを知ることによってそれぞれの時間がより有意義になるようにしたいと思

い、そこから多くの人を巻き込みながら準備をしていきました。当日はポスターボードがないという予想通りのトラブルもありましたが、いろいろな方の知恵と協力の結果、あのような会場が完成しました。長机に囲まれた狭い会場の中でも、あちこちで熱心な議論がされているのを見ながら、最後までできて本当によかったと思いました。

個人的には課題や反省点もありますが、学生実行委員をやりながら学ぶことがたくさんあったので、このような機会にだけたことに感謝しています。

9/10 2日目 ▶▶ 講演会 2



それぞれの講演の最後には、質疑応答の時間が設けられました。座長を務めた講演委員が、それぞれが担当した講演者の研究内容を事前に調査していたこともあり、活発な議論が交わされました。(千葉)

▶▶ グループワーク



構成された10個のグループでは、それぞれ英語で真剣にディスカッションが行われていました。前日のポスターセッション後に、記事のタイトルを提出させていることもあり、議論が空転することもなく進行し、招待講演者の先生もグループにアドバイスをするなど、とても密度の高いワークが構成されていました。(小西)

伊藤優 グループワーク担当委員 (生命理工学研究科 D1)



今回のグループワークを立案するにあたって、研究室で日常的に行われるトレーニングの続きではなく、ふだん使わない頭を使う企画をたてることを重視しました。記憶をたどったところ昔読んだ本に「20年後を予想出来るのは研究者だけである」という言葉があり、現在の技術、研究成果から大局的な未来を予想するというのは面白そうだと考え、それに焦点をしばり企画を立てました。今年の夏の学校で

行った「Future誌の発行」は元々「雑誌を発行したい」という、最初はボツのアイデアでしたが、先生方のアドバイス、別の委員からの提案など色々取り込み、膨張と収縮を繰り返しながら形にすることができました。当日はいろいろありましたが、結果的に意外に上手くいったのでよかったです。今後は、なぜ結果的に意外に上手くいったのかを熟考し、この経験を解釈していきたいです。この過程はグローバルな場でリーダーシップをとる際に立つと確信しています。そのような意味で今回の夏の学校は貴重な経験を積むことができました。

▶▶ プレゼンテーション



各グループとも、短時間で準備したとは思えないほどのクオリティの高いスライドを披露。発表も立派で、審査員の先生方も感心。ライブグループの発表内容に真剣に聞き入る学生の表情が印象的です。専門性の高いものからユーモア溢れるものまであり、参加者からは感嘆の声あり、笑いあり、大変盛り上がりました。(黒川)

▶▶ リーディング・質問・パネルディスカッション



レベルの高い論文が登場。皆、惹き込まれるように読んでいます。パネルディスカッションではふだん観ることのできない教員同士の熱い討論。質問タイムでは、発表グループと質問者との必死な攻防。目の前で展開するライブ感に参加者の笑顔も絶えません。時間があつという間、広いはずの教室がとても狭く感じたのは、この盛り上がりのせいですね。(黒川)

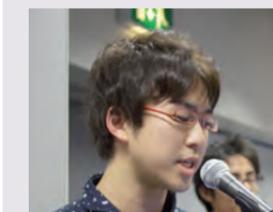
▶▶ クロージング



▶▶ 文化交流夕食会



伊藤貴広 文化交流夕食担当委員 (生命理工学研究科 D1)



文化交流夕食会は本年度初の試みでした。まずは本企画の意義について説明致します。我々ACLSの学生は将来的に幅広い世界で活躍していくことが期待されており、高い専門性やコミュニケーション能力のみならず、多様な文化を理解することも同様に重要であると考えられます。他国の文化を理解するためにまず必要になる自国文化の深い理解を得ること、これが本企画の目的です。同時に、海外参加学生にとって夏の学校をより魅力的なイベントにするとい

う狙いもありました。

外国での実施であるがゆえの、様々な困難がありましたが、教員、事務、そして学生実行委員の方々の多大なサポートもあり、なんとか開催することができました。当日は【浴衣体験】、【折り紙体験】、【日本酒体験】、【日本茶体験】、【書道体験】、【日本食体験】を行いました。どれも海外の方にとっては珍しくかつ興味深いものだったようで、みなさんに楽しんで頂けたと自負しております。

最後にこの場をお借りして夏の学校に携わった全ての方々に礼を申し上げます。

Future誌

2013年の夏の学校で作成された仮想雑誌「Future」は、10年後の2023年版には3報、20年後の2033年版には7報が採録されました。2つの「Future」には、全員で論文を読み、質問し、さらに招待講演者にも参加していただいたパネルディスカッションなどの議論を踏まえて栄えある最優秀の記事が決定され、それぞれの「Future」の表紙を飾っています。今回の夏の学校に関わった教員一同、この雑誌に書かれている未来が10年後、20年後に、彼らの手による実現やコラボレーションの種となり、グローバルリーダーとして活躍する日に、ACLS夏の学校2013の本当の意味での成功となると信じています。(小西)

